

大島の平和思想に影響を与えた人びと

ベルリンオリンピック陸上十種競技優勝者ハンス・ハインリッヒ・ジーフェルト氏を讃える「ジーフェルト賞(オリンピック平和賞)」を大島は1982(昭和57)年7月に日本人初、世界で11人目に受賞した。受賞の推薦状を書いたのは、大島旧知のベルノ・ウィッシュマン博士。1980(昭和55)年のモスクワ五輪ボイコットに「政治がスポーツを利用すべきではないと猛反対した」点でも大島と同じ考えをもっていた。

人生の友ウィッシュマンに対し、人生の師はカール・ディーム博士であった。ベルリンオリンピックで聖火リレーを発案したスポーツ史家である。1947(昭和22)年、ケルン・スポーツ大学を設立したディーム(初代学長に就任)を見た大島は、日本と同じ

敗戦国のドイツが、スポーツでも復興の道を歩み始めたことに力を感じた。ディームと大島はクーベルタンが掲げたオリムピズム(五輪精神)を共有しており、根底には、文明社会の中でスポーツが人間の心身を調和させ、オリンピックが世界を結ぶ平和運動になるとの信念があった。

もう一人、大島に強い影響を与えたのが、史上唯一の五輪メダリストでノーベル平和賞受賞者、フィリップ・ノエルバーカー卿である。大島は「この核の時代に、人類にとって最大の希望は、オリンピックが存在することである。オリンピックこそは史上最大の平和運動である」というノエルバーカーの口癖を好み、彼をこよなく尊敬した。

オリンピック功労賞と大島鎌吉スポーツ文化賞

1985(昭和60)年、大島は76歳で永遠の眠りについた。没後、国際オリンピック委員会(IOC)は大島に「オリンピック功労賞」を贈った。生存者だけに贈る規定から、逝去後に贈呈されたのは異例である。大島の世界スポーツに対する貢献度の高さがうかがえる。

大島没後4年の命日である1989(平成元)年3月30日、関西大学だけでなく、日本におけるスポーツ文化の振興・推進に資することを目的として「大島鎌吉スポーツ文化賞」が制定された。大島の三段跳び世界新記録15.82mにちなみ、1582名+aの有志からなる特別委員会が組織され、10名の選考委員によって2氏、2団体が第1回の受賞者に選ばれた。このときトリプル賞を受賞したのは、ベルリン五輪マラソン金メダリストの孫基禎であった。ベルリン五輪時、孫には副賞として古代ギリシャの

青銅製カブトが贈られることになっていたが、孫の手に渡らないまま行方不明になり、40年後ベルリン国立博物館にあることが分かった。孫は返還運動を起こしたが、その協力者の一人が大島であった。大島は知り合いのIOC委員らを通じて返還を働きかけ、1986(昭和61)年、ベルリン五輪50周年記念行事で孫は、ようやく栄冠の品を手にした。大島は、カブトが返還される前年に亡くなったが、二人は死ぬまで兄弟のような付き合いを続けた。第1回の受賞者に選ばれるにあたり、孫はカブトのレプリカを関西大学に寄贈した。大島との友情の証しであった。



孫基禎氏が友情の証しとして贈った古代ギリシャのヘルメット(複製)

《今も心に響く大島語録》

アメリカは、降っとらんかもしれんな。

雨の朝、陸上部の合宿所で時間をつぶしていた部員たちの所へ来た主将・大島の「練習は」の問いかけに、ある部員が「今日は雨ですから」と答えたとき、大島が発したことばである。これを聞いた瞬間、部員たちは我先にグラウンドへ飛び出していた。「外国のライバルたちは晴天のもとで練習に励んでいるかもしれない。対戦相手は日本ではなく、世界だ」ということを端的に示したことは。

(大島と同じ三段跳びの選手で、ベルリン五輪にも出場した戸上研之の回想)

伝統とは、日々、自分たちが練習を積み重ねて築くもの。先輩からもらうものじゃない。

総合関関戦で両大学の選手たちに大島が語ったことば。過去の栄光を追いかけてばかりで、新しく作る努力をしなければ伝統はすぐに消滅してしまう、が大島の持論であった。

(校友会機関紙「関大」341号、教育後援会会報「葦」66号)

スポーツの敵は敵ではない。潜在能力を引き出してくれた得がたい友人である。

「世界の若者たちが交流し、友だちになることの影響は、はかり知れない。戦争になっても友だちを鉄砲でなんか撃てない」と、スポーツが国境を超えて人間を結びつけることを大島は説いた。

(1982年6月9日付朝日新聞「ひと」欄、2014年12月18日付毎日新聞「五輪の哲人 大島鎌吉物語3」)

若者は未完成だ。だから明日がある。だから魅力があるのだ。

核廃絶平和運動を進め、日本の青年に世界と人間のあり方を考えてほしいとスポーツ界の牽引車になった大島は、明日を担う青年に夢を託すロマンチストであり、信念のために闘う万年青年でもあった。

(伴義孝著「大島鎌吉」『関西大学百年史 人物編』)

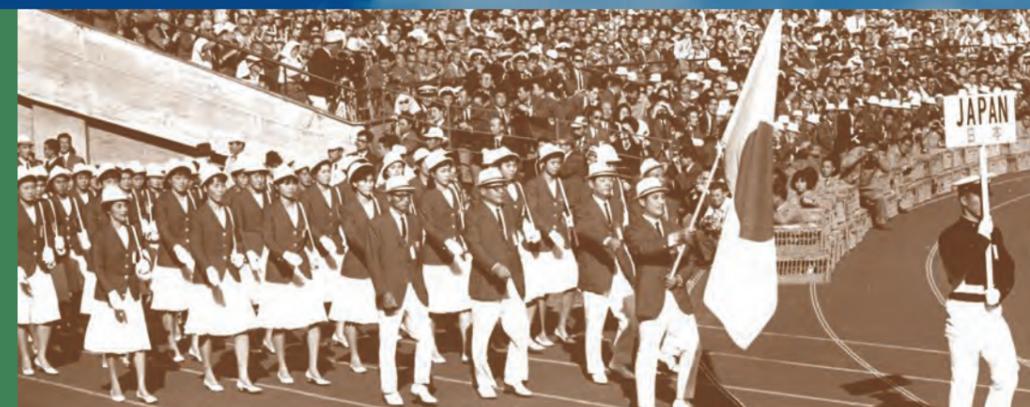


2019年度 関西大学 年史資料展示室 企画展

スポーツの人 五輪の哲人

大島鎌吉

お お しま けん きち



スポーツの人 五輪の哲人 大島鎌吉

大島鎌吉は、1932(昭和7)年のロサンゼルスオリンピック陸上三段跳びの銅メダリストで、1936(昭和11)年のベルリンオリンピックにも出場しました。戦時中は毎日新聞社のベルリン特派員を務め、戦後は運動部記者のかたわら、陸上競技で後進の育成にあたりました。1964(昭和39)年に開催された東京オリンピックでは日本選手団団長、選手強化対策本部長の重責を担い、その後も日本スポーツ少年団の発足や、大阪体育大学の創立などに関わり、晩年には、アジアで初めてとなる「オリンピック平和賞」を受賞しました。

さまざまな「スポーツの顔」を持った大島が生涯をかけて考えたのは、スポーツと平和の関係でした。大島は若いころからスポーツ思想をあらゆる媒体で表現し、「跳ぶ哲学者」と呼ばれました。そして、その精神を継ぐため、関西大学は1989(平成元)年に「大島鎌吉スポーツ文化賞」を制定しました。

二度目の東京オリンピックを明年に控えた今、大島が取り組んだオリンピズム(五輪精神)に根ざした青少年教育や平和活動の軌跡をあらためて振り返り、スポーツが、オリンピックが、平和にどう貢献できるかを考えるきっかけになればと思います。



大島鎌吉

ロス五輪で銅メダリスト

1908(明治41)年11月10日、金沢市に生まれた大島鎌吉は、金沢商業学校に進学後、三段跳びに熱中し、1927(昭和2)年8月の第8回上海極東オリンピックで準優勝するなど、非凡な才能を開花させた。

卒業間近、関東の大学からの勧誘をはねのけ、「何も出さないけれど、来てくれ」と説得した関西大学の気概に感動し、大阪行きを選択した。「日本は、東京と大阪の両輪駆動でなければならない」という反骨精神からの決断でもあった。

1928(昭和3)年、関西大学予科に入学した大島は、1932

(昭和7)年のロサンゼルス五輪に三段跳び選手として出場。15m12の記録で銅メダルを獲得した。このとき、大島は競技本番3日前に起こった選手村でのガス風呂爆発により両脚や腹、両腕に大やけどを負い、競技当日は包帯を外したばかりの状態であった。身体能力だけでなく、精神力の強さも示すエピソードである。



ロサンゼルスオリンピックの銅メダルジャンプ

二度目のオリンピック、ベルリン五輪出場

1936(昭和11)年のベルリンオリンピックに関西大学からは大島、長尾三郎、戸上研之、古田康治、福田時雄、谷口睦生の6選手が出場した(早稲田大の8名に次ぐ)。大島はこのとき、陸上選手団の主将を務めた。1934(昭和9)年に15m82の世界新記録をマークしていた大島ではあったが、ベルリンでは、1回目の跳躍15m07が最高という成績で、2大会連続のメダルには届かず、6位入賞となった。

大島たちが活躍した背景には、当時「東洋一」と呼ばれた千里山学舎の大グラウンドの存在が大きい。このグラウンドの完成が昭和初期のスポーツ黄金時代を招き、数多くのオリンピック選手や名選手がここから育っていった。

関西大学創立100周年を期し、この栄光のグラウンドの南側半分に総合図書館・情報処理センターが建設されることになった。当時、体育OB会長を務めていた大島は、大学発展のため、図書館建設に理解を示した。開館式は1985(昭和60)年4月11日に挙行され、あわせてグラウンドの記念碑除幕式も行われた。

4年後の1989(平成元)年3月には、大島の自邸に植えられていた月桂樹が記念碑の右側に移植され、解説板とともに大島の五輪精神を今に伝えている。



総合図書館前に建つ記念碑と月桂樹

戦争体験が平和思想の原点

大島を監督とする日本陸上競技連盟の選手団が1939(昭和14)年8月の第8回ウィーン国際学生大会に参加している最中、第2次世界大戦が勃発した。選手団は北欧に脱出して帰国の途についたが、大島は毎日新聞社のベルリン特派員としてドイツが降伏するまでの6年間、ドイツに駐在した。1945(昭和20)年5月、ソビエト軍のベルリン侵攻時、大島は兵士につかまり、7月中旬、帰還兵を運ぶ国際列車に乗せられ、シベリアを経て京城に到着した。九死に一生を得た大島を迎えたのは、ベルリン五輪マラソン金メダリストの孫基禎を初めとした朝鮮の五輪関係者であった。8月1日朝、空襲警報が鳴り響く京城空港を

飛び立った双発機に搭乗した大島は、6年ぶりに祖国の土を踏んだ。すぐに出社した大島は、自分が打電した「ベルリン陥落」の特ダネ記事を探したが、残念ながら記事は見当たらなかった。

大島の平和思想の原点は、従軍記者として欧州を駆けめぐった戦争体験に求められる。著書『死線のドイツ』では、戦場での凄惨な状況を生々しく描き、「フィンランドの誇りであったかつてのオリンピックの花形達が、何故にその八割も戦場の露と消えねばならなかったか」と表現した。この強い怒りが大島のその後の生き方を決め、五輪精神を具現化する青少年教育や平和運動に人生を捧げることになるのである。

東京五輪運営の中心に

1959(昭和34)5月末、1964年の開催地を決める国際オリンピック委員会(IOC)総会が開かれた際、平沢和重(もと外交官・NHK解説委員)は「小学校国語 六年」の教科書を手に「五輪の旗」という話を紹介して招致演説を行った。これは戦後まもなく大島が小学生向けに作った『オリンピック物語』に執筆した話が題材になっており(教科書監修者の一人は志賀直哉)、五輪旗の五つの輪は五大陸を示し、「スポーツを通して世界の国々を結びつけようとした」と記されていた。スポーツの貢献を信じ、平和の夢を子どもに託そうとした大島の信念の現れであった。

招致活動では、大島自身も「オリンピック・メダリスト・クラブ」という組織を作り、世界各国のアスリートに東京招致をPR、総会前には東欧諸国を回ってロビー活動も展開した。結果、総会ではデトロイト、ウィーン、ブリュッセルを大きく引き離し、

東京が圧勝した。

1963(昭和38)年4月、選手強化対策本部長に就任した大島は、翌年1月に国会のオリンピック東京大会準備推進特別委員会に参考人として呼ばれ、メダルの予想数を尋ねられた。このとき大島は、それまでの最多7個を一気に倍増させ「金メダルを15個以上獲得する」と宣言した。結局、東京五輪での日本の金メダル数は16個で、アメリカ、ソ連に次ぐ3番目の成績。この数字は今も最多記録となっている。



東京オリンピック日本選手団の入場(提供:毎日新聞社)

平和の祭典・オリンピックがもたらしたもの

1964(昭和39)年10月10日、快晴の国立競技場に各国選手団の最後を飾って日本選手団が入場してくると、ひと際高い拍手と歓声が沸き起こった。日本選手団団長である大島は、先頭の国旗に続く列の役員の人として行進した。

15日間に及ぶ熱戦が繰り広げられたオリンピックは10月24日、閉会式を迎えたが、式典開始直後、予想もしないシーンがテレビに映し出された。外国の選手が日本の旗手を担ぎ、各国入り乱れて登場したのである。このとき、大島は日本役員団の中を行進しながら友好の雰囲気をかみしめていた。後日、親しい後輩にこう語った。「世界平和のためにオリンピックが必要だというのは、ああいうことなんだよ」。

オリンピック閉幕後、国民のスポーツへの関心が高まり、地域のスポーツクラブや施設づくりは、広く市民向けのものが考えられるようになった。それに先駆けること4年、1960(昭和35)年6月の日本体育協会理事会で大島は、青少年時代をスポーツと体育に結びつけ、健全な育成を図ることを目的とする「日本スポーツ少年団」の結成を提案していた。トップアスリート強化を一方で、底辺のスポーツを拡大することにも大島は強い関心を持っていた。「日本スポーツ少年団」は1962(昭和37)年6月、正式に発足。そこで育った選手が、日本代表トップアスリートとしてオリンピックにも出場するようになった。